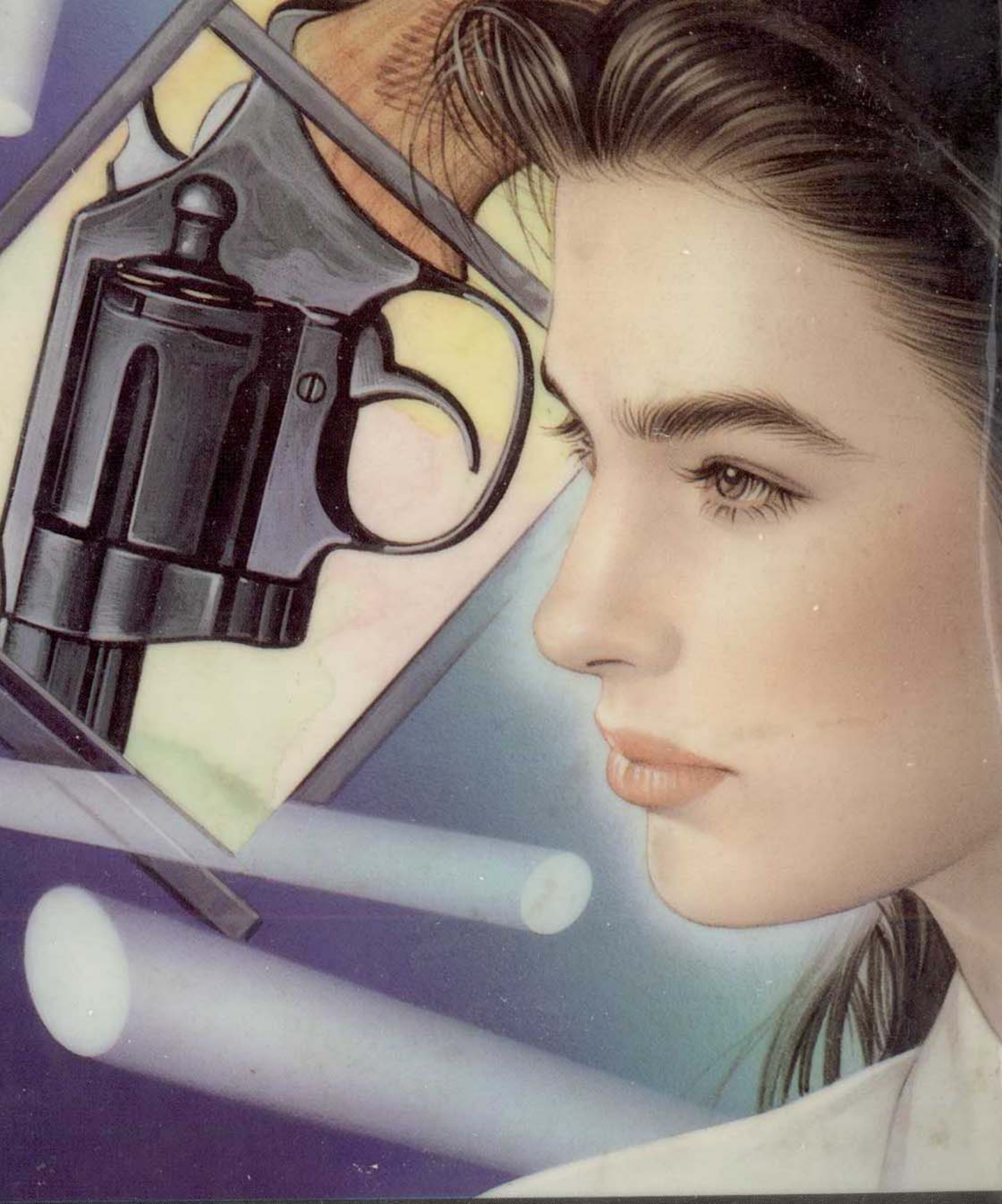


KAPPA NOVELS

長編推理小説 書下ろし

西麻布 紅の殺

にしあざぶ くれない

おおたにようたろう

大谷羊太郎

お願い

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、最近、「カッパ・ノベルス」にかぎらず、どんな小説を読まれたでしょうか。また、今後、どんな小説をお読みになりたいでしょうか。読みたい作家の名前もお書きくわえいただけませんか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（〒112-11）
光文社出版局

長編推理小説　西麻布紅（にしあざぶくれない）の殺人

1990年10月25日　初版1刷発行

著者　大谷羊太郎（おおたにようたろう）

発行者　大坪昌夫

印刷者　堀内俊一
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所　東京都文京区音羽2
振替 東京 6-115347
株式会社 光文社
電話 東京（942）2241（代）

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（榎本製本）
表紙の模様・意匠登録 116613
© Yōtarō Ōtani 1990

ISBN4-334-02892-6
Printed in Japan

西麻布 紅の殺人

江苏工业学院图书馆
藏书章

KOBUNSHA

目次——西麻布（にしあざぶ）紅（くれない）の殺人

第一章　二人の目撃者　5
第二章　七夕（たなばた）の再会　29
第三章　タイムリミット　52
第四章　古い住所録　74
第五章　交通死亡事故　97
第六章　不運なデート　130
第七章　湖畔のそよ風　161
第八章　最後の壁　187
第九章　ときの流れ　217

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本文のイラストレーション　奥田ミコ

第一章　二人の目撃者

1

奇怪な殺人事件が起きたのは、七月六日金曜日の午後十時過ぎである。

この夜、梨村建築設計事務所では、相川と北見という二人の社員が残業していた。

事務所は、四階建て小型雑居ビルの最上階にある。練馬区の北部に位置したこのあたりには、ビルやマンションなどの中高層建物と、一般の住宅とがまじりあって建っている。

ところどころ、空地や畑地、それに雑木林も残っている。夜が更けると、少し離れた表通りから、車の走る音が届いてくるばかりで、一帯は静かになる。

社員の一人、相川は二八歳と、まだ若い。軽い疲れを感じた彼は、製図デスクから離れて、窓のそばに寄った。室内には、軽くクーラーをきかせてあった。閉めてあった窓の戸を開けて、外の空気を吸い込む。

なにげなく、彼は隣りの建物を見た。

この建物と、二〇メートルほどの空地をへだてて、三階建ての「鏑木商事ビル」が向き合っている。こちらも、こぢんまりした外観だが、そちらのビルは、いっそう小さい。

鏑木商事という、自動車部品の卸業者が使っていた。

その三階の西の端の部屋だけに、明かりがついている。相川から見ると、正面より視線を左に回した

方向に当たる。窓は大きく開いていて、つい先刻までとは違い、今はカーテンが閉じてあった。

（鏑木さんは、クーラーが嫌いだからな）

相川も、そして北見も、隣りの会社の社長、鏑木千一と日頃から親しくしていた。鏑木は四〇を少し超した年齢で、温厚な人柄である。彼が、クーラーよりも、扇風機を愛用しているのは、本人から聞いていた。

つい二〇分ほど前も、窓から外を眺めた相川と、そちらの部屋の窓べにいた鏑木と、顔が合った。お互い、笑顔で会釈したばかりであった。

それにしても、窓を開けておきながら、カーテンを引くというのが、いささか妙に思えた。夜に入ってから、風が出てきた。

（カーテンを開ければ、涼しい自然の風を、室内に取り入れられるのに）

相川がそう思ったとき、夜風がカーテンの裾を大きくめくった。その合わせ目に、人の姿が現われた。

瞬間、相川は「あっ」と叫んだ。四〇歳になる先輩社員の北見が、その声におどろいて、手を休めた。

「どうしたんだね」

「お隣りの様子がおかしい。ちょっとここに来て、見てくださいよ」

北見も、急いで席を離れた。二人は窓ぎわに並び、隣りの建物を見つめた。

二つのビルにはさまれた暗い空地は、未舗装のまま、駐車場に利用されている。何台かの車が停まっていた。

四階から、向かいの三階の西の端の窓を眺めるわけなので、左にやや見降ろす向きになる。

カーテンの合わせ目を、背中で割るように立っている男、それは鏑木らしい。斜め後方からの観察でも、彼の横顔をどうやら捉えられる。

問題は鏑木の動きであった。何者かに襲われて、

たじたじと後ろに追いつめられているように見える。首が横に動いた。今度は、男の顔がはっきりと見えた。

「あれは、間違いなく、鏑木社長ですよ」

相川が言った。

「あの顔は、恐怖で引きつってますよ。ぼくは、視力には自信があるんだ」

両の手で、クッションらしきものをつかんでいる。それを、自分の胸のあたりに押しつけていた。そして、からだをすくめ、まるでクッションを楯にして、前からの攻撃を避けようとしている姿に見える。

風に煽られたカーテンが、さらに大きく広がった。そして、二人の目に、もう一人の人物の姿が映じた。

ただし、見えたのは、突き出した片手だけであった。黒っぽい金属の筒のようなものが、手の先からのぞいている。

「おい、あ、あれは、ピストルじゃないのか」

かすれたような声で、北見が言った。

鏑木が、突然、行動を起こした。壁に沿って、横に逃げるような動きに見えた。

そのとき、風の力が弱まり、カーテンの合わせ目が閉じた。家具の倒れるような物音が、夜の静寂の中に、二度、つづいて聞こえた。

そしてつぎに、「パン」という固い音が響いた。

カーテンが揺れ、その合わせ目がまた開いた。鏑木が大きくのけぞって、後ろに倒れかかる姿が見えた。上を見上げるようなポーズだったから、顔がよく見えた。目をいっぱいに見開き、口をパクパクと動かしている。すさまじい苦悶の表情を、二人はまともに見た。

後退してきた彼の背中が、窓枠にぶつかった。その反動で、今度は上半身を前に折った。そのまま床に倒れる。ここでまたカーテンが閉じ、鏑木の姿を隠した。

今度は、不自然にカーテンが揺れた。これは、カーテン越しに、だれかが窓の戸を閉めている動きであった。窓が閉められると、カーテンは風の影響を断ち、静止の状態になった。

そのときになって二人は、はじめて夢から醒めたような気になった。

「大変なことが起きた」

「強盗でも入ったんだよ、北見さん」

顔を見合わせた二人は、つぎの瞬間、部屋から飛び出していた。一刻も早く、傷を負った鏑木を救いたい。その願いが、二人を迅速な行動に駆り立てた。

建物に、エレベータはついていない。東西に走る通路の東の端に階段がある。そこを駆け降りて、二人は一気に一階裏口に出た。

こちらの建物は、南側に玄関口があり、北側の東端に裏口がある。空地をはさんで、向かいの建物の裏口が向き合っていた。

二人は、まばらに停まっている車の間を走り抜けて、暗い駐車場を横切った。

2

鏑木商事ビルの裏口には、若い相川が一足先に着いた。息を切らせながら、ドアの把手を回した。

「開かないよ、北見さん」

「ロックされてるのか」

「とにかく、早くしないと助かる命も助からない」

「それじゃ、正面玄関に回ってみよう」

二人は、建物の東側に沿って、北側に回った。しかし、玄関の戸も、厳重にロックしてある。

「やっぱり、ここからも入れない」

灯の消えた玄関を、北見は恨めしげに見上げた。

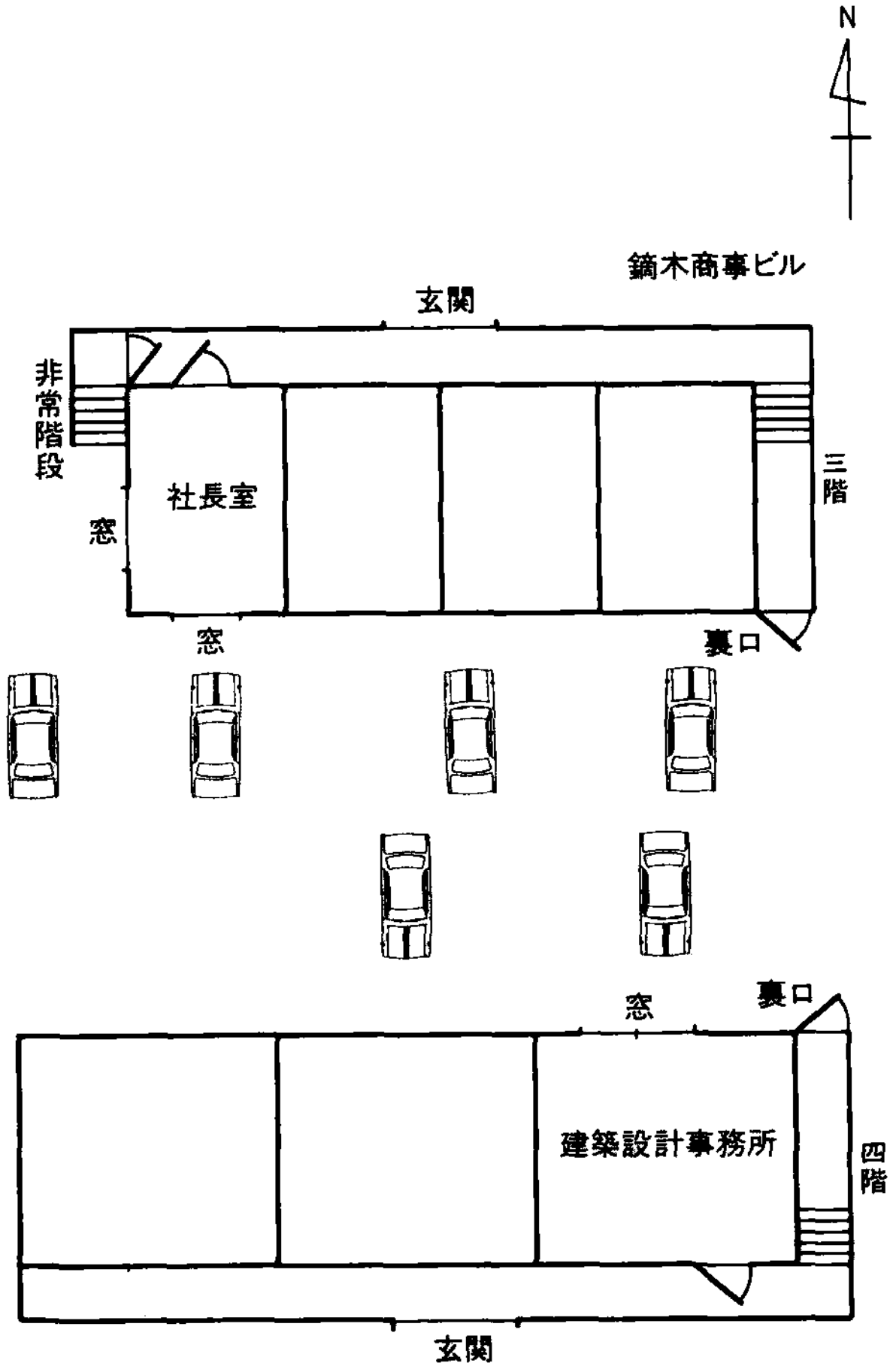
「じゃ、非常階段を使ってみましょう。でも、各階から外に通じる扉が、もし内側からロックしてあれ

ば、建物の中には入れませんが」
その言葉の終わらないうちに、相川は駆け出していた。慌てて、北見もその後を追う。
建物の西側側面に、非常階段がついている。二人は、建物の北側の壁に沿って走り、建物の角を左に折れ、西壁に取り付けられた鉄の階段を駆けあがる。
「よかった、ロックしてなかった」
三階の踊り場の上で、北見は歓声をあげ、鉄のドアを開けた。
ドアの内側には、三階通路がまっすぐに伸びている。建物北側の壁に沿う通路である。非常口からいちばん近いドアが、問題の社長室であり、その先に「経理課」「会議室」などと、プレートの出ている部屋が並んでいた。
建物の内部は、しんと静まり返っている。
「鏑木さん、大丈夫ですか」
北見が大声で名を呼び、そして相川は、ドアの把手を回した。
返事のないのは予想していた。重傷を負っているに違いなかった。声も出せず、床でうめいているのだろうか。
「ドアは開きませんよ」
相川が言い、二人は、耳を澄ませた。室内からは、なんの物音も聞こえてこない。そこでドアを乱打して、鏑木の名を連呼してみたが、やっぱり反応はなかった。
「とにかく、急いで警察に知らせよう。鏑木さんを早く救うには、合鍵も必要だし」
北見は、一一九番と一一〇番に急報するよう、相川に命じた。
そして自分はここに残り、ドアを見張れる通路の陰で、監視をつづけると言った。
「多分、犯人はもう逃げたと思いますが、もし中にいたら危険ですよ。拳銃を持っているようですか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ら」
相川が不安を訴えると、十分に気をつけるからと、北見は答えた。
相川は電話をかけるために、大急ぎで非常階段を降り、駐車場を斜めに横切って、設計事務所に引き返した。
四階の事務所のドアは、半開きになっていた。さっき、異変を見たとき、二人は夢中で部屋を飛び出した。ドアを閉める余裕さえ失われていた。
相川は、室内に駆け込んだ。デスクの上に置かれた電話機に飛びつく。
そのとき、ふと視線が、思いがけないものを捉えた。
それは、まさに想像を絶する光景だった。
製図デスクの並んだ床の上に、半袖シャツ姿の男が転がっている。背を丸め、両足の膝を深く曲げ、横向けに倒れている。右手が、腹部を抱え込むように押えている。
男の左手と腹部との間には、大きい感じのクッションがはさまれていた。そして、クッションと男のからだのすき間からは、鮮血が流れ出していた。
恐る恐る身じろぎもしない男の顔をのぞき込んだ。
(こ、これ、は、鏑木さん――!?)
相川は、目を疑った。
(まさか、そんなことがあってたまるか)
鏑木が、何者かに撃たれた瞬間を、この部屋の窓から目撃した。そしてそれは、あくまで、向かいの建物の中で起きた出来事である。
(なのに、撃たれた鏑木さんが、この部屋で倒れている)
頭が混乱してきた。
相川は、もう一度、慎重に観察した。いつも着ている作業用半袖シャツ姿の鏑木は、すでにこと切れているように見えた。

殺人現場位置関係略図



（だれかが、鏑木さんの死体を、こちらに運び込んだんだろうか）

気をとり直して考えてみた。しかし、そんな時間のゆとりなど、とてもなかったはずだと、はっきり言える。

（いったい、なにがどうなってるんだ）

幻覚、妄想といった言葉が、浮かんだり消えたりした。

あまりの奇怪さに、相川はしばらくの間、まるで異次元に迷い込んでしまったような気持ちで、呆然と突っ立ったままでいた。

やがて、ことの重大さに目覚めた彼は、震える指先で電話機のプッシュボタンを押した。

3

通報を受けて、警察は急行した。死体のあった部屋には、ただちに現場保存の張り番が立つ。鏑木商事の社長室にも、警官が向かった。警察から連絡を受けて、鏑木の妻も合鍵を持って駆けつけてきた。社長室のドアは開いたが、内部はまったくの無人であった。

警視庁からは、河津裕之警部をチーフとする殺人班が出動した。

それぞれの現場に、鑑識班が入り込んで、作業を進めている間に、二人の目撃者から、最初の事情聴取を行なった。

鑑識の仕事が終わるのを待って、まず設計事務所内で、目撃者を立ち会わせ、現場検証にかかる。

「記憶違い、あるいは見間違いなどは、絶対になかったんだね」

河津警部は、部下たちと二人の目撃者を囲み、しつこいほど、同じ質問を繰り返した。

いつものように、八木沢警部補だけが、グループ

から離れて、室内の隅ずみまでを、細かく見て回っている。

八木沢は、五〇歳を超え、髪もかなり白くなっている。痩せ型で、老けた感じもある。

（ふだんは無口で、控えめな人なのに、いったん事件の捜査となると、まるで見違えるように、生き生きとしてくる）

八木沢さんは、捜査を生き甲斐にしている人なんだと、二〇代の若手刑事、村岡紀夫は、彼の姿を目で追いながら思った。

八木沢の過去を、村岡は知らない。しかし、初対面の印象では、明るさが感じられなかった。偏屈な性格の持ち主のようにも思えた。家族もないという。

しかし、いくつかの事件捜査を、彼と一緒に手がけているうち、八木沢の本来の姿を知った。見かけとは違い、心はやさしい。

それに、彼の持つ抜群の推理力には敬服した。班のメンバーのだれもが、村岡同様、八木沢には一目も二目もおいている。

「どうも、信じられない状況なんだが」

河津警部は、首をひねった。

「まるで、死体が空中を飛んで、こちらの部屋に移動したように聞こえるがね」

二人の目撃者は、強く主張した。

「いいえ、お話ししたことは、細かい点まで確かです。一人だけの目ならとにかく、二人揃って、はっきりと見ているんですから」

目撃者たちを、ひとまず解放すると、河津班のメンバーは、隣りの建物に移った。

社長室の広さは、日本間にして、一二畳ほどになるだろう。中央部に、ゆったりと応接セットが据えてある。

社長専用の大型デスクは、部屋の東側の壁を背にして置かれている。仕事のやりかけ、という雰囲気

で、デスクの上には、書類が乱雑に散っていた。
床の上には、来客用の椅子が二つ、勝手な方向を向いて、倒れたままになっていた。
実用本位で、気取りのない社長室であった。殺された鏑木社長も、作業用の半袖シャツを着ていたのを、村岡は思い出した。
窓べに立ち、ガラス窓越しに地上を眺めている八木沢のそばに、村岡は寄った。
「なにか、気になる発見がありましたか」
「いや、まだないね。ただ、三階の高さがどのくらいか、目で確かめているんだ」
「犯人が、この窓から、死体を外に運んだとでも思っているんですか」
「それができれば、階段を使うより早いがね」
「いえ、なまじの梯子(はしご)じゃ届かないし、ロープを使うとなると、ロッククライミングもどきの離れ技がいりますよ。どっちにしても、死体を運ぶとなると、階段を運んだほうが早いでしょう」
河津警部を囲んだグループの環は、室内を西に移動した。
西に向いた壁にも、広い窓がとってあった。その窓の下には、背の低い書架が並んでいる。中には、書類用のバインダーがつまっていた。
「この窓には、ロックがかけてある」
そう言って警部は、ロックを解いて窓を開けた。窓の右手に、非常階段三階踊り場の柵がのぞける。
「とにかくこれで、この部屋の様子を、ざっと見たわけだが」
河津警部は、部下たちを見回した。
「ここで、当面の謎を整理してみよう」
一同は表情を引き締めて、警部の顔を見る。
「目撃者の言葉を信ずると、この部屋で殺人があり、そして死体は信じられない速さで、隣りのビルに移った。細かい謎の分析は、後回しにするとして、犯

人と死体の移動経路を考えてみたいんだ」
警部は、死体発見直後の鏑木商事ビルの状況を説明した。
ビルの出入口は、玄関と裏口の二ヵ所である。そして、その両方に、内側からロックしてあった。
「つまり、犯人はこのどちらからも逃げられなかった。そこで、残る逃走口を調べてみたのだが」
ビル内部の窓の類いは、一ヵ所をのぞいて、すべて内側からロックされていた。その一ヵ所とは、この社長室の南側窓である。
「犯人は、高所の離れ技を演じて、この窓から逃げたのかもしれない。しかし、問題は死体なんだよ」
警部の声に、部下の一人が答えた。
「死体を抱えて、移動するとなると、窓からの離れ技は無理ですよね。なにしろ、非常に短い時間のうちに、死体は動いたのですから」
「すると犯人は、死体を抱えて、非常階段を駆け降りた、と考えるのが常識だな。社長室のドアは、ロックされていた。しかしこれは、セミオート錠だから、ノブのボタンを押して外に出れば、閉じたとたん自動的にロックがかかる。
犯人は、そのようにして、非常階段の外に出たのだろう。非常口のドアは、防犯上、ロックすれば外からは開けられないが、非常のときに備えて、内側からは自由に開けられる仕組みだ」
警部は困ったような顔になった。
「ところが、その非常階段は、二人の目撃者が下からのぼってきた。時間的に見て、階段を降りるまでに、この二人と鉢合わせしてしまうと思う」
「死体を抱えての移動となると、大変な作業ですよ」
部下のだれかが言った。
「ああ。しかし、目撃者たちは、怪しい人影を見ていない。だから、謎なんだな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com